

山梨eライブラリー

すけつこの流儀

〈下〉

山梨日日新聞企画報道グループ

山梨日日新聞社

目次

第6部「助け合いの村」道志

第7部 支え合いのかたち 識者に聞いた

〈1〉	しばむ集落で老いて	9
〈2〉	還暦グループの出版	17
〈3〉	水源守る新しい林業	21
〈4〉	古里の資源を発掘	25
〈5〉	移住者が編んだ「村の物語」	29
第7部 支え合いのかたち 識者に聞いた		
〈1〉	豊かさ、幸福の基準再考を	45
〈2〉	「自助」「共助」行政と連携して	51
〈3〉	新旧の「公共」結ぶ方策を	56
〈4〉	コミュニティースクールに注目	62
〈5〉	共助ネットワークを厚く	68
〈6〉	「人のため」が快感生む	74
〈7〉	平らな関係、自分で選ぶ縁	80

SAMPLE

第8部 あれから

〈1〉誰もが集う場 理念広がる	105
〈2〉不登校生の居場所が「教室」に	110
〈3〉「朝市」発 広がる輪	115
〈4〉母親仲間 緩やかな関係	120
〈5〉交流拠点のカフェ 装い新た	125
〈6〉84歳 慕う人いる限り	129
〈7〉ファームの営み多角的に	133

第9部 1000人に聞いた「すけっこ」

〈特集〉人づきあいが生活の鍵	139
〈連載1〉生活の不安	182
〈連載2〉子育て、介護：悩む女性	188
〈連載3〉独り暮らし 頼りは	194
〈連載4〉生活水準と年収 満足度は	200
〈連載5〉負担感少ない縁づくり どうする	206

第10部 現代版「すけっこ」とは 取材班の提言

〈1〉甲州弁3語に継続の鍵	215
〈2〉「1000人の声」に見えたこと	219
〈3〉連載を終えて 記者たちの思い	233
すけっこの流儀〈下〉あとがき	238

※各部の扉にある日付けは、連載時の紙面掲載年月日です。

SAMPLE

第6部 「助け合いの村」道志

SAMPLE

(2011年12月26日～31日)

SAMPLE

〈1〉しぼむ集落で老いて

年の瀬が迫る2011年の12月23日。道志村月夜野の佐藤一教（90）は、木造の納屋で正月支度をしていた。陸稲のわらで、慣れた手つきで太いしめ縄を編む。少し早いかもしれないが、神棚に飾った。

5年ほど前までは近くの松の枝で、正月飾りを作った。だが、松の背が高過ぎて、枝を取るのおおっくうになった。13年前に妻を亡くし、独り暮らし。餅つきはやめ、鏡餅を供えることもない。

月夜野は神奈川との県境にある集落。道志川の左岸、勾配のきつい山肌に17戸が並ぶ。山と山に挟まれた道志村にあつて、月夜野は特別に空が広い。晴天の夜には南に広がる丹沢山系の尾根の上を月が滑り、集落を照らす。そこから、月夜野の名が付いた。

家から30キロ離れた相模原市の会社勤めが長かった佐藤は、早起きが習慣だ。午前6時すぎに目が覚めると、目薬をさして、顔を洗う。コップ一杯の牛乳、前日に多めに炊いておいた米と残り物で朝食を済ます。

軽トラックで畑に乗り付け、昼食を挟んで日が暮れるまで野良仕事に精を出す。夕飯のおかずはたいてい一品。この日はサバの干物を焼いた。後片付けが終わると、ブラウン管テレビのチャンネルをがちゃがちゃと回し、眠気とともに床に就く。

若いころには30戸を超えたこともあった集落。1戸当たりの家族の数も、いまよりずっと多かった。佐藤の家は8人きょうだい。裕福ではなかったが、家族や地域が支え合って生きていた。

月夜野では、特に深い関係にある親族を「地類」と呼ぶ。家屋を建て増すために土地を分けたことが、呼び名の由来という説もある。

急病人が出ると地類にまず声がかかり、病院への連絡や搬送の段取りを決める。たいていは神奈川県内の診療所。次に隣近所で行く「組合」にも声をかけて、病人を運ぶかごの担ぎ手を集める。地類は葬儀や婚礼も取り仕切る。組合はお茶や料理を出して客人を接待した。

母親が家を空けるときは、近所の女衆が食事を作りに来てくれた。米やみその貸し借りも頻繁だった。すぐに見返りを求めない助け合いを「すけっこ」と呼んだ。

SAMPLE

結婚した佐藤は1男2女を授かった。子どもたちは道志小月夜野分校を卒業すると、県境をまたいで隣村の中学に通った。狭く、やせた畑と山林を継がせて、苦勞させたくなかった。村内には仕事がない。だから、佐藤は県外で子どもたちが仕事に就いても、やむを得ないと思っていた。

どの家も同じだった。わが子に学をつけさせるため、外へ、外へと出した。子どもは次第に減り、月夜野分校は1987年、廃校に。佐藤の地類も3戸だけになった。どこにも若い衆の姿はなく、すけっこどころか、近所付き合いもなくなっていた。

しばらくでいく集落。人が住まなくなった家は、朽ちるのも早い。1年もたたずに畳が腐って、床が抜け落ちた家もあった。相模原市にいる長男は「こつちに来ないか」と誘ってくれるが、「この家の畳の上で、ぱったり死にたい」と思っている。移り住むつもりはない。

佐藤は卒寿を迎えて、物忘れがひどくなった。車の運転もままならない。「まだまだ人の役に立ちたいって気持ちはあるけどね。いまじゃあ、自分のことすらままならんだから。年寄りばかりじゃあ、もう何もできんよ」

失われていく助け合い。その一方で、佐藤の声に呼応するかのように、新しい



正月を前に、わらで太いしめ縄を作る佐藤一教。妻が亡くなった13年前から、独り暮らしが続いている＝道志村月夜野

SAMPLE

「すけっこ」のかたちも生まれている。

◇ ◇

昔ながらの人付き合いが色濃く残る山梨県内の中山間地。第6部は過疎化が進み、かつての支え合いが失われてゆく中、地縁血縁に頼らない新しい「すけっこ」に携わる人々たち取材した。

▼「すけっこ」とは甲州弁で「助け合い」を意味する言葉